

先人顕彰シリーズの展示

ふるさとの豊かな文化の礎と、すぐれた先人の遺徳を偲ぶ...

◆第1次展示 H2.7～H3.6	清子 (1895～1984) 女性民俗学の大家 (毛馬内)
◆第2次展示 H3.7～H4.6	義典 (1845～1920) 郡長として殖産興業に尽くした (花 輪)
◆第3次展示 H4.7～H5.7	恭助 (1886～1928) 欽山日記「阿津免草」の著者 (尾去沢)
◆第4次展示 H5.8～H6.7	北嶺 (1838～1918) 「戊辰戦役図絵」を描く (毛馬内)
◆第5次展示 H6.8～H7.9	佐助 (1844～1920) 醤油醸造業の基礎を築いた (花 輪)
◆第6次展示 H7.10～H8.9	高慶 (1888～1920) 武道を奨励し青少年を指導 (花 輪)
◆第7次展示 H9.10～H10.9	武志 (1909～1980) 民俗学と菅江真澄の研究 (八幡平)
◆第8次展示 H11.11～H12.10	克三 (1888～1984) 湖南研究と地域先人の顕彰に尽力 (毛馬内)
◆第9次展示 H12.11～H13.11	隆朝 (1895～1987) 音楽教育と音楽起源の研究 (花 輪)
◆第10次展示 H13.12～H14.11	健治 (1898～1978) 音楽、郷土芸能の振興に寄与 (毛馬内)
◆第11次展示 H14.12～H15.11	收蔵 (1879～1940) 北方民族研究の草分け (花 輪)
◆第12次展示 H15.12～H16.11	伍一 (1866～1894) 国益に殉じた生涯 (毛馬内)
◆第13次展示 H16.12～H17.11	善一郎 (1893～1986) 彫塑・彫刻など文化活動に貢献 (花 輪)
◆第14次展示 H17.12～H18.11	月嶺 (1811～1871) 盛岡藩を代表する絵師 (花 輪)
◆第15次展示 H18.12～H19.11	良太 (1778～1855)・恭助 (1806～1870) 学者の家系 (毛馬内)
◆第16次展示 H19.12～H20.11	艸干 (1882～1969) 花輪俳談会を創立 (花 輪)
◆第17次展示 H20.12～H21.11	露山 (1891～1966) 毛馬内俳句会を設立 (毛馬内)
◆第18次展示 H21.12～H22.11	青山家の人々 山相家 青山の名を高めた (尾去沢)
◆第19次展示 H23.3～H24.3	清子 (1895～1984) 女性民俗学の開拓者 (毛馬内)
◆第20次展示 H24.10～H25.3	和井内貞行「没後90年展」 十和田湖開発の父 (毛馬内)
◆第21次展示 H25.6～H26.5	春光 (1901～1935) 才能をうたわれた若き画家 (毛馬内)
◆第22次展示 H26.8～H27.6	内藤湖南「没後80年展」 東洋史学の開拓者 (毛馬内)
◆第23次展示 H27.6～H28.3	島山文象遺墨展 書道の発展に寄与 (毛馬内)
◆第24次展示 H28.4～H29.3	内藤湖南「生誕150年展」 東洋史学の開拓者 (毛馬内)

先人顕彰シリーズ ㉔

新しい文化を
築いた人たち

当先人顕彰館は、鹿角にゆかりの深い先人に関する資料の発掘収集・保存、事跡の調査研究と公開展示をしています。

世界的な東洋史学者「内藤湖南」、十和田湖の開発に尽力をした「和井内貞行」の両氏をメインに常設展示し、さらに各界の先覚者を順に展示紹介しております。

内藤湖南「生誕150年展」

H28. 4～H29. 3



鹿角市先人顕彰館

〒018-5334秋田県鹿角市十和田毛馬内字柏崎3番地2
TEL 0186-35-5250

東洋史学の開拓者



Konan Naito

内藤湖南

なにとう こなん

1866—1934 (毛馬内)

◇新聞・雑誌記者

明治20年に上京してから約20年はジャーナリストとして活躍、優れた論説を数多く執筆、数冊の著書も刊行してその見識と文才は人々の注目を集めました。また中国を訪れ見聞を広めたことから学者、政治家との交流も深まり中国問題の専門家の地位を固めました。

◇教育者

綴子小学校のわずか2年の滞在でしたが、歴史教科書を手作りして教育するなど教え子から代議士や県会議員が出ています。また42歳の時、狩野亨吉（大館出身、京都大学文科大学長）より誘いを受け京都帝国大学では東洋史学を担当しました。

◇東洋史学者

世界の中国学の三大中心は北京、パリ、京都と言われるように湖南の独創的シナ（中国）学研究は今なお高く評価されています。中国史研究の最大の功績は中国の近世は宋（960～1278）から始まるという時代区分でした。

◇書と漢詩文

幼少の頃から素養を積み、漢詩は額面や書幅となつて郷里では大事にされています。書は中国の晋の時代の王羲之や七世の孫の智永を尊びその品格の高い端正温雅な独特な書風は高く評価されています。

略歴 a brief personal record

慶応2年(1866) 内藤調一、容子の二男として毛馬内に生まれ、名は虎次郎。
明治18年(1885) 秋田師範学校を卒業、綴子小学校教員となる。
明治20年(1887) 上京し大内青巖が主宰する「明教新誌」次いで三宅雪嶺の「日本人」ですぐれた論説を書く。
明治27年(1894) 大阪朝日新聞社に入社し、その後高橋健三（内閣書記官）を助け新内閣の政治綱領を書く。
明治30年(1897) 朝日退社後「近世文学史論」を発表し、黒岩涙香の「万朝報」に入社「燕山楚水」を刊行。
明治33年(1900) 大阪朝日に再び入社。満州視察、清国での知己を得ながら閩島問題の調査を行う。
明治40年(1907) 京都帝大の狩野亨吉に招かれ東洋史学を担当。文学博士号を授与され、その後「支那論」を刊行。
大正13年(1924) ヨーロッパ訪問。「日本文化史研究」「新支那論」刊行。後に帝国学士院会員になる。
昭和6年(1931) 京大退職後恭仁山荘に住み、昭和天皇に唐の宰相杜佑の著した「通典」から御進講する。
昭和9年(1934) 6月死去。勲二等瑞宝章を贈られる。